

映画『君の名は。』論

—セカイ系を視座として—

黒田翔大

(日本文化学専門/博士後期課程)

1.はじめに

新海誠監督の映画『君の名は。』は2016年8月26日に公開された。新海は「『君の名は。』は僕にとって、今までの40年ちょっとの人生をすべてぶつけたような渾身の一作」¹だと言及しているが、『君の名は。』の興行収入は250.3億円であり、2016年における日本映画興行収入で第1位を記録した。同年の日本映画興行収入の第2位『シン・ゴジラ』は82.5億円、第3位『名探偵コナン 純黒の悪夢』は63.3億円、第4位『映画妖怪ウォッチ エンマ大王と5つの物語だにゃん!』は55.5億円、第5位『ONE PIECE FILM GOLD』は51.8億円であり²、『君の名は。』の人気の高さを伺うことができる。ちなみに、外国映画では第1位の『スター・ウォーズ フォースの覚醒』が116.3億円であり³、それと比較しても『君の名は。』が記録的なヒット作だといえることが分かる。

岡崎優子は『君の名は。』の人気ぶりについて次のように述べている。

2016年のユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされ、各社発表のヒット番付では横綱・大関クラスにランクイン。もはや映画業界だけに留まらず、「君の名は。」は16年を代表するキーワード、社会現象の一つとなった。

『君の名は。』は「16年を代表するキーワード」だというのは過言ではなく、2016年において看過できない存在だといえよう。様々なメディアに取りあげられ、『君の名は。』というフレーズを耳にしなれないことは難しかったであろう。

本稿ではこのように2016年に大ヒットした『君の名は。』を扱っていく。西田谷洋はアニメや漫画を研究対象とすることに対して次のように述べている。

文学テキストを受容・制作するための規約・規則の知である文学能力は、固定的ではなく、成長・発達するものである。かつては、小説や詩は人々が直接的に享受し、その膨大な読書経験が文学能力を発達させていった。ところが、一九七〇年代以降、小説や詩に代わって漫画やアニメーションの視聴覚経験が文学能力の基盤となり、今日ではゲームが主

¹ 新海誠『新海誠 Waiker——光の輝跡』角川書店、2016年、p. 17。

² 『キネマ旬報』2017年3月下旬号、p. 38。

³ 注2に同じ、p. 40。

要な位置を占めてはいないだろうか。小説や詩の読解・制作は、漫画やアニメ、そしてゲームなどで獲得した物語理解・生成能力を小説や詩に拡張適用することで可能となるとすれば、現代の書き手や読み手は漫画・アニメ・ライトノベル・ゲームなどのポピュラー・カルチャーから対象への動機付け、感動のモードや物語技法を学ぶようになってはいないだろうか。⁴

物語理解の能力はかつてのように小説や詩などのみから得られるものではない。現代ではアニメや漫画が大量に流通しており触れる機会は非常に多い。つまり、現代においてアニメや漫画などは日常的なものであり、したがってそこから受ける影響は大きい。そのため、それらを扱う必要性は高いということである。

先述した 2016 年の日本映画の興行収入ランキングを振り返ると、上位 5 つ中 4 つがアニメであり第 7 位には『映画ドラえもん 新・のび太の日本誕生』が入っている。外国映画に目を向けても、第 2 位『ズートピア』、第 3 位『ファインディング・ドリー』、第 4 位『ペット』である。このように、日本映画と外国映画の両方からみても、現代においてアニメの人気の高さを伺うことが可能である。

そこで、本稿では 2016 年に人気を博した『君の名は。』には何が描かれているのかというのを探っていきたい。それによって、『君の名は。』という作品がヒットした意義の一端に言及できると考える。そのために、まずはセカイ系としての『君の名は。』に述べた後、宮水三葉と立花瀧の恋物語、糸守の住民を隕石の落下から救済する物語に触れていくというように順を追っていく。

2. 『君の名は。』のセカイ

まず初めに『君の名は。』のあらすじについて触れておきたい。『君の名は。』のストーリーに関して、『新海誠 Waiker——光の輝跡』において次のように纏められている。

千年ぶりに訪れる彗星の接近を 1 か月後に控えた日本。山の奥深くにある田舎町で暮らす女子高生・三葉は、町長である父の選挙活動や家系の神社の風習にうんざりしていた。そんなある日、彼女は自分が都会に暮らす男の子になった夢を見る。一方、東京で暮らす男子高校生・瀧も自分が田舎で暮らす女子高生になる夢を見ていた。繰り返される不思議な夢と、抜け落ちている記憶。やがて 2 人は、眠っている間にお互いの心と体が入れ替わっていることに気付く。

三葉と瀧は、戸惑いながらも入れ替わった日の出来事をメモに残し、情報を共有することで、時にケンカし、時に楽しみながら不思議な体験を乗り越えていた。しかし、ある日を境に突然入れ替わりが起こらなくなってしまう。瀧は、三葉に入れ替わった時の記憶を頼りに、彼女へ会いに行こうと決心するが、辿り着いた先で、衝撃の真実を知る。⁵

⁴ 西田谷洋『ファンタジーのイデオロギー——現代日本アニメ研究』ひつじ書房、2014 年、pp. 3-4。

⁵ 注 1 に同じ、p. 6。

岐阜の糸守という田舎に住む高校生の三葉と東京に住む高校生の瀧を軸に物語は展開されていく。瀧は三葉に会いに行こうとするが、そこである事実を知ることになる。瀧と三葉はお互いに入れ替わるといふ現象が生じていたのだが、2人は同じ時間軸にいたわけではなかった。瀧から見れば三葉の世界は3年前であり、お互いの間に3年のタイムラグが存在していたのである。さらに三葉の住む糸守は隕石落下により消滅しており、その災害によって三葉は死んでしまう。そこで、瀧はもう一度三葉と入れ替わって、その災害から三葉を救おうと行動に出るのである。

さて、『君の名は。』はセカイ系の作品だと呼ばれることも多いが、セカイ系とは一体どのような意味を示す言葉なのだろうか。東浩紀はセカイ系と呼ばれる作品の構造に関して次のように述べている。

それは、ひとことで言えば、主人公と恋愛相手の小さく感情的な人間関係(「きみとぼく」)を、社会や国家のような中間項の描写を挟むことなく、「世界の危機」「この世の終わり」といった大きな存在論的な問題に直結させる想像力を意味している。典型的な作品としては、高橋しんの二〇〇〇年から二〇〇一年にかけてのマンガ『最終兵器彼女』、新海誠の二〇〇二年のアニメ『ほしのこえ』、秋山瑞人の二〇〇一年から二〇〇三年にかけての小説『イリヤの空、UFOの夏』が挙げられることが多い。⁶

セカイ系と呼ばれる作品は、主人公の恋愛という小さな物語と世界を救うという大きな物語とが接続するが、その接着部である中間項の具体的な描写が省略されているといったものである。主人公の恋愛と世界の救済がなぜ関係性を持っているのかということとは明確に示されていないのである。

ただし、このようなセカイ系の定義に当てはまらないものもセカイ系だと評価されており、セカイ系という言葉の定義は曖昧である。しかも、セカイ系を代表する作品だとされているものも、必ずしもセカイ系の定義と合致するわけではないようである。例えば、前島賢は『ほしのこえ』では主人公の恋愛が世界を救うということと直結しておらず、『イリヤの空、UFOの夏』では軍隊の描写など社会的存在が描かれていることを指摘している⁷。そして、セカイ系の作品を包括して次のように定義している。

『新世紀エヴァンゲリオン』という大ヒット作のあと、萌え文化が花開く一方、かえって、物語への回帰が起こった。そして、巨大ロボットや変身ヒーロー、戦闘美少女といった荒唐無稽でフィクショナルな存在を導入しつつも、自意識や恋愛といった素朴で普遍的なテーマを描く作品たちが生まれ、それがセカイ系と呼ばれた。⁸

『君の名は。』がセカイ系の定義と合致するかどうかということ自体はさして重要ではないが、東と前島の定義に大体当てはまるといえよう(ただし、『君の名は。』には糸守の描写も多々

⁶ 東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生——動物化するポストモダン 2』講談社現代新書、2007年、p. 96-97。

⁷ 前島賢『セカイ系とは何か』星海社文庫、2014年、p. 10。

⁸ 注7に同じ、p. 214。

あり、中間項の描写が存在しないとはいえない)。

いずれにせよ、目を向けるべきはセカイ系と呼ばれる作品に顕著にみられる物語の構造である。『君の名は。』は三葉と瀧の恋愛と糸守を隕石による災害から救うという2つの物語がセットになっているというセカイ系の作品の特徴を持っている。この2つの物語がセットだということはどのような意味を持つのだろうか。大澤真幸はセカイ系の作品が、このような2つの物語が組み合わされることに関して次のように述べている。

しかしもともとは、君と僕との恋という小さな話と、世界の問題は、別の話です。『君の名は。』では、この本来は別の話が作品の中でくっ付いている。その接続に不自然さがあるのです。

なぜセカイ系では、この二つの話がくっつくのでしょうか。

こうしたお話が接続して多くつくられて来たことの社会心理的な背景を考えると、そこには二つの欲望、二つの思いが込められている。

一つはもちろん、恋愛です。純粋な、もうこれ以上ありえないほど純粋な恋愛に対する憧れがある。

そしてもう一つ、この恋愛とは「とりあえず」別に、この世界の中で自分が何者かでありたい。自分が意味のある存在でありたい。世界の中で自分は自分でありたいという欲望がある。いわば「世界への欲求」です。⁹

恋愛という個人的な欲望と世界の中で意味を持つ存在になりたいという社会的な欲望、この2つの欲望がセカイ系の作品が持つ特徴的な物語構造と関わっているということになる。それでは、恋愛と世界救済の2つの物語に注目して『君の名は。』の作品をみていきたい。

3.三葉と瀧

それでは、三葉と瀧の恋愛物語についてみていく。

三葉と瀧の両者が入れ替わるというのが2人の接点が生まれるきっかけとなっている。しかし、この2人がどういう原理で入れ替わるのか、なぜ入れ替わるのかといった理由に関しては具体的な言及はされていない。そこで、この2人が入れ替わることの理由付けを作中からいくつか抽出してみたい。

三葉は糸守という町で暮らしているが、その田舎さに対して次のように愚痴を言う。

こんな町、本屋もないし歯医者もないし。電車は二時間に一本やしバスは一日に二本やし天気予報は対象地域外やしGoogleマップの衛星写真は未だにモザイクやし。コンビニは九時に閉まるしそのくせ野菜の種とかハイグレード農機具とかは売ってるし。

学校からの帰り道、私とサヤちんの対糸守町・愚痴りモードはまだ続いている。

マックもモスもないくせにスナックは二軒もあるし、雇用はないし、嫁は来ないし、日照時間は短いし。ぐちぐちぐちぐち。普段はこういう町の過疎っぷりが逆にすがすがしく

⁹ 大澤真幸『サブカルルの想像力は資本主義を超えるか』角川書店、2018年、pp. 301-302。

どこか誇らしく感じられたりもするのだけれど、今日の私たちは本気で絶望しているのだ。

10

糸守は本屋や歯医者がなく、電車やバスの本数も極端に少ない。糸守がどれほど田舎なのかということが示されている。そんな糸守に対して三葉は不満に感じている。もっともその田舎さが魅力的だと感じないわけではないようだが、時々本気で嫌気が差すこともあるようである。そんな三葉に向かって、友人のテシーが「カフェにでも寄ってかんか」と誘って、その先は自動販売機だったというエピソードがあるように、糸守は三葉の求めている都会的なものが一切ないのである。

また、三葉にとって宮水神社の巫女としての仕事にも嫌な点がある。それは口噛み酒を作る行為である。

私は口をすぼめて、今まで嚙んでいた米を升の中に吐き出す。それは唾液と混じってどろりとした白い液体となって口から垂れる。ざわざわざと、聴衆がどよめいたような気がする。ええええん。私は心の中で泣く。お願い、みんな見ないでー。

口噛み酒だ。

米を嚙んで、唾液と混ざった状態で放置しておくだけで、発酵してアルコールになるという日本最古のお酒。これを神様に備えるのだ。昔は色々な地域で作られていたそうだけれど、二十一世紀になってまでこんなことを続けている神社が果たして他にあるのだろうか。ていうか巫女服姿でこれってマニアックすぎるわよいったい誰得!? (中略) だら～……っと、唾液と米を私はまた吐き出す。心の中でまたさめざめと泣く。¹¹

三葉にとって口噛み酒を多くの聴衆の前で行うことは恥辱的な行いである。普段三葉に意地悪をする同級生たちは、口噛み酒を作る三葉に対して「きゃ～あたしゼツタイ無理い」などと発言している。

そして口噛み酒を作り終わった後に三葉は神社の階段で叫ぶ。

いろんな出来事や感情や展望や疑問や絶望がないまぜになって、胸が爆発しそうになっている。一段飛ばしに階段を駆け下り、踊り場の鳥居の下で急ブレーキをかけ、喉いっぱい夜に冷気を送り込む。胸の中のぐちゃぐちゃを、その空気でもって私は思いきり吐き出す。

「もうこんな町いやー！ こんな人生いやー！ 来世は東京のイケメン男子にしてくださいー！」

さーい。さーい。さーい。さーい……

夜の山にこだました私の願いは、眼下の糸守湖に吸い込まれるようにして消えていく。反射的に口にした言葉のあまりのくだらなさに、私の頭は汗と一緒にすーっと冷えていく。

¹⁰ 新海誠『君の名は。』角川文庫、2016年、p. 31。

※『君の名は。』の作品引用は同作の小説版のものによる。なお、以後本稿では書名と頁数のみを記載する。

¹¹ 『君の名は。』、pp. 38-39。

ああ、それでも。
神さま、本当にいるならば。
どうか——。¹²

三葉は糸守が田舎であるということ、そして宮水神社の巫女としての仕事に対して、全面的にはではないにせよもうそれから逃れたいという気持ちがある。そして次の人生では現在の状況とは反対ともいえる「東京のイケメン男子」になりたいという願望があるようだ。糸守の女子高生と対極にあるような「東京のイケメン男子」への欲求、そこから三葉が瀧と入れ替わる理由の一端をみることができる。

それに対して、瀧が田舎の女子高生と入れ替わる理由の手掛かりはなかなか見当たらない。瀧は東京での生活に対して何か不満を持っているのだろうか。瀧は顕在的ではないものの潜在的に何か現状に対して不満を抱いている、それを三葉の状況の反対として想像するなどということは可能かもしれないが具体的な描写から探すことは困難である。ただ、瀧は記憶には残っていないものの過去に一度三葉と会ったことがある。2人の間には3年のタイムラグが存在しており、瀧は3年前に三葉と電車の中で会っている。その時に三葉からもらった組紐を瀧はお守り代わりとして今でも時々手首に着けている。瀧は潜在的ではあるもののその時の三葉の印象を強く抱いており、それが現在においても続いているというところから何とか理由付けはできそうである。

三葉が瀧への恋愛感情に気付くのは、瀧と奥寺先輩がデートをする当日のことである。三葉は瀧と入れ替わっている最中に奥寺先輩との距離が縮み、2人はデートの約束をするまでになる。三葉は奥寺先輩とのデートを楽しみにしているが、その当日は入れ替わりがなく、奥寺先輩とデートするのは三葉ではなく瀧となる。それに対して、三葉の目からはなぜか涙が流れる。それは奥寺先輩とのデートができなくて残念だということではなく、瀧と奥寺先輩がデートをすることに対する悲しみの念があったからであろう。それは、三葉がその日に東京に出向いていることから伺える。三葉は瀧に会うために東京へ行く。

もし会えたら、瀧くんは、すこしは、喜ぶかな——。
ふたたび三葉は歩き出す。そして考える。

こんなふうにやみくもに探し回ったって、会えっこない。会えっこないけれど、でも、確かなことが、ひとつだけある。私たちは、会えばぜったい、すぐに分かる。私に入っていたのは、君なんだって。君に入っていたのは、私なんだって。

100パーセント、誰だってぜったいに間違えようのない足し算みたいに、そのことだけは、三葉は確信している。¹³

三葉は瀧と奥寺先輩がデートしている東京で、瀧を探そうとする。「もし会えたら、瀧くんは、すこしは、喜ぶかな」というように三葉が瀧に好意を抱いていることは明らかである。ただし、三葉は瀧に会おうとするが意識的にか無意識的にかそれを避けているようにも伺える。瀧と奥

¹² 『君の名は。』、pp. 42-43。

¹³ 『君の名は。』 p. 188。

寺先輩のデートコースは三葉が考えたものであり、三葉は自分が考えていた場所に向かえば会える確率は高い。しかし、三葉はそのデートコースの場に少なくとも作品内の描写では行っていないようにみられる。ここには、三葉は瀧が好きだが、瀧は好きな相手とデートしているといった葛藤が行動に表れているのだろう。

それに対して、瀧の三葉に対する感情はどうかというと、そこには好意があったと考えられる。そのことはデートの終わりに奥寺先輩から「君は昔、私のことがちょっと好きだったでしょう」「そして今は、他に好きな子がいるでしょう?」と言われるように、自覚しているかはともかく、瀧は三葉に惹かれつつあったのである。

三葉と瀧はお互いに入れ替わり、お互いの生活を何とかやっていく。そのような特殊な体験を通じて、2人は知らず知らずの内にお互い好意を持つようになる。何物にも代えられない他の人とは共有できないような経験を2人はするからである。

ここでやや脇道に逸れるかもしれないが、3年のタイムラグという設定は、電話によって簡単に繋がってしまうということの阻止しており、三葉と瀧の距離が入れ替わりによりゼロ距離となるが実際は遠いという状況を導くことに成功しているように思われる。もし、三葉と瀧が電話によってリアルタイムでの会話が成立していたら近いようで遠いという2人の距離を感じることは難しかったであろう。

『ほしのこえ』においても電話は登場しているが、ミカコとノボルの距離が縮むものとしては機能しない。ミカコは地球から遠ざかるにつれて携帯電話のメールや声のメッセージには遅延が生じる。最初は数秒や数分といった遅延も、だんだん数日、数年というようになっていく。土井伸彰は『ほしのこえ』における電話の機能に関して次のように述べている。

『ほしのこえ』の主要なモチーフである携帯電話は、本来は距離を縮めるものである。しかし、この作品がロボットアニメというフォーマットを借用することで語るのは、距離を縮めるための道具だからこそ際立って感じられる、克服し得ない距離だ。モノログのようなナレーションがさらにその孤独・疎外に感情の強度を与えるだろう。男女の言葉がユニゾンとなってそのまま平行線を辿るとき、その感情はますます甘美なものとなる。¹⁴

携帯電話は本来ならミカコとノボルの距離を縮めるものである。ただし、携帯電話を用いて連絡を取り合うということはお互いが離れているということでもある。それをより強く感じてしまうように機能しているのが『ほしのこえ』における携帯電話である。お互いのメールや声のメッセージが届くのに数日や数年も要するのであれば、両者の間の距離を意識せざるを得ない。それがこの作品の2人の恋愛に大きな影響を与えている。

『君の名は。』では、瀧が三葉に電話を掛けるがそれは接続されることはない。

スマホを操作し、三葉の携帯番号を表示する。十一桁のその番号を、じっと見る。入れ替わりが起きはじめた頃、何度かけてもなぜか繋がらなかった番号。その番号に、指で触れる。発信音が鳴る。そして、スマホから声が聞こえる。

¹⁴ 土井伸彰「この夢のようなセカイ」(『ユリイカ』2016年9月号)、p. 140。

お客様のおかげになった電話番号は、現在使われていないか、電源が入っていないか、電波の届かない範囲にいるため……

スマホを耳から離し、終了アイコンを俺は押す。¹⁵

瀧が三葉へ電話を掛けても繋がらないのは、既に三葉は3年前に死んでいるからである。繋がったとしても、それは三葉ではなく別人ということになる。三葉と瀧はお互いの心身が入れ替わっており、それによりお互いの距離は無化されている。しかし、実際は遠く離れており携帯電話が繋がることもない。それは近くて遠いというもどかしさを三葉と瀧に感じさせることになる。

4.糸守の救済

次に社会的欲望について見ていく。

瀧は奥寺先輩とのデート後から三葉との入れ替わりは起こらなくなる。瀧は明確な自覚をしているわけではないものの三葉への好意は確実に生じているため、三葉を探しに糸守へと向かう(ただし、瀧は三葉や糸守の存在をほとんど記憶しておらず探し出すことに苦勞する)。そして、宮水神社のご神体の巨木のある場所を発見し、そこには三葉の口噛み酒が残されていた。それを瀧は口にする。

——これは、
三葉の記憶?

俺はなすすべもなく濁流に流されるように、三葉の時間にさらされている。¹⁶

瀧は口噛み酒を飲んだことにより、三葉との入れ替わりの日々を三葉の記憶から思い出す。そして、糸守に隕石が落下する当日の三葉と入れ替わることになる。瀧は三葉を死なせたくないで、糸守の住民を隕石の災害から救おうと行動に移す。瀧と三葉の恋愛成就のためには、何としても災害から救う必要がある。

瀧は三葉の友人とともに作戦を練る。

「で、で、で……電波ジャック!?!」

サヤちゃんがまたうわずった声を上げる。カレーパンをかじりながら、テシガワラが解説する。

「こんな田舎の防災無線は、伝送周波数と起動用の重畳周波数さえ分かりゃあ簡単に乗っ取れるでな。音声に特定の周波数が重ねられとるだけで、スピーカーが作動する仕組みやから」

メロンパンを片手に、俺は言葉を引き継ぐ。

¹⁵ 『君の名は。』、pp. 105-106。

¹⁶ 『君の名は。』、p. 150。

「だから、学校の放送室からでも、町中に避難指示を流せる」¹⁷

糸守の変電所を爆破して電波を乗っ取る。そして、高校の放送室から避難を呼びかけるといふ計画である。そして、最も重要なのが瀧が町長を説得するということである。町全体の住民を動かすには、やはり町長の力が求められる。

瀧は町長に事情を説明するが、隕石が糸守に落ちるということを町長は受け入れない。「よくもそんな戯れ言を俺の前で!」「本気で言っているなら、お前は病気だ」と全く相手にされない。瀧は町長の説得に失敗し、「三葉なら……説得できたのか? 俺じゃだめなのか?」と考える。そんな瀧は神社のご神体の場所に三葉がいることを察知しそこに向かう。

「まだ、やることがある。聞いて」

テシガワラとサヤちゃんとの計画を、俺は説明する。真剣に頷きながら俺の話を書く三葉を見て、こいつは覚えているんだと俺は悟る。星が落ち、町が消えたことを。その時に、自分が一度死んだことを。三葉にとって、今夜は再演の夜なのだ。¹⁸

瀧は三葉と出会い、お互いの心身はもとに戻る。瀧は三葉に計画の説明をし、町長の説得を含めて残りの作戦を託す。三葉は糸守の住民を救い生き残るために走り出す。三葉にとっても糸守の住民を守ることは瀧との恋愛成就のために必要なことであり同義だともいえる。

瀧は「三葉なら……説得できたのか? 俺じゃだめなのか?」と感じているが、隕石の災害から救済するためには瀧の行動は必要不可欠であった。計画を立てサヤちゃんやテシガワラを動かしていたのは瀧であり、その土台があったからこそ三葉は父である町長と向き合うことに専念できた。三葉は母の死後父と話す機会はさほど多くなかった。神社を出て町長となった父を嫌っており、面と向かうこともなかった。しかし、三葉は糸守のみんなを救いたい、瀧のことが好きだという思いから、父と対峙する心が決まる。町長自身も妻の死後娘と面と向かって話すことは避けていたと思われるが、今日を見据えて真剣に臨む娘に対して耳を傾けざるを得ない。瀧が町長に災害が起こることを言い、三葉が言い、そして現在彗星が割れていることが確認できる状況である。これらのことから町長は三葉の言うことを信じ、住民に避難を呼びかけその大半は助かる。三葉と瀧の2人が協力したからこそ、最悪の事態を回避することに成功したのである。

瀧は三葉との入れ替わりに対して、次のように考える。

俺はふと思う。これは、宮水家に受け継がれてきた役割なのかもしれない。千二百年ごとに訪れる厄災。それを回避するために、数年先を生きる人間と夢を通じて交信する能力。巫女の役割。宮水の血筋にいつしか備わった、世代を超えて受け継がれた警告システム。

¹⁹

宮水神社は約200年前に「繭五郎の大火」により、お宮も古文書も焼失してしまっている。

¹⁷ 『君の名は。』、pp. 167-168。

¹⁸ 『君の名は。』、pp. 202-203。

¹⁹ 『君の名は。』、p. 158。

それによって、組紐の文様や舞が何を意味するか分からなくなっている。つまり、三葉は神社の巫女としての社会的役割が不明な状態に置かれていたのである。しかし、入れ替わりが「警告システム」であれば三葉は自身に社会的意味を見出すことができる。糸守に隕石が落下するのであれば、自身の周囲の人たちだけを非難させるということもあり得るわけだが宮水神社の人間としてその選択肢はないであろう。瀧への好意から生き残りたいという気持ち、そして自身の果たすべき社会的役割という両者があることによって三葉は行動することができたのである。そして、三葉との入れ替わりにより糸守の生活を経験した瀧も、三葉だけでなく糸守のみんなを救いたいという気持ちへ接続される。三葉と瀧の恋愛は糸守の隕石災害からの救済へと繋がるのである。

5.おわりに

『君の名は。』は、三葉と瀧の恋愛と糸守の隕石災害から住民を救うということが連続性を持って描かれている。個人的なものが社会的なものとも関係を持ち、何物にも代えられないような絆が2人の間に結ばれる。そのため、三葉と瀧の恋愛やその関係性というのは相対的なものではなく絶対的なものだと感じられる。助川幸逸郎は『君の名は。』のヒットした理由に関して「価値観の多様化に、みんなが疲れているせいかもしれません」²⁰と言及しているが、そのような現代の状況もこの作品が多くの人々に受け入れられたことと関わっているのだろう。

²⁰ 志水義夫、助川幸逸郎『『君の名は。』の交響』ひつじ書房、2017年、pp. 50-51。